



当時のユダヤ人難民が敦賀に残っていた時計（人道の港 敦賀ムゼウムで展示）

**杉原千畝「命のビザ」**  
第2次世界大戦中の1940年（昭和15年）、リトアニアのカウナス日本領事館には、ナチスの迫害から逃れるために、日本通過ビザを求める多数のユダヤ人難民が押し寄せました。当時のカウナス日本領事代理杉原千畝氏は、悩み苦しんだ末、人道的立場から外務省に背き、独断で彼らに日本への通過ビザを発給。約6000人のユダヤ人難民の命を救いました。ビザの発給を受けたユダヤ人難民はシベリア鉄道でウラ

ゴなどの果物を、無償で配った  
● 銭湯の主人は浴場を無料で開放した  
● 駅前の時計店の主人は所持金もなく空腹の彼らを見て所持していた時計や指輪などを買い取った。さらに店にあった食べ物も渡した



アンナ・ドマラツカ氏の父レオポルド・クレシヤ氏の写真

人道の港の歴史の始まりから95年余り。金ヶ崎緑地にある人道の港 敦賀ムゼウムではこの2つの人道の港の歴史に関連する資料を展示しています。残念ながら、ポーランド孤児として敦賀に上陸した方々は全員亡くなられましたが、孤児の一人であるレオポルド・クレシヤ氏の長女アンナ・ドマラツカ氏が昨年9月に敦賀を訪れました。人道の港 敦賀ムゼウムを見学した後、孤児たちが上陸した地点にも足を運び「父と同じ道をたどって嬉しい」と話しました。また、杉原千畝の「命のビザ」で敦賀港に上陸した

市では今後も、このようなつながりを大切に、貴重な資料の展示などを通して「敦賀港だからこそ伝えられる命の大切さと平和の尊さ」を発信し、孤児や難民たちを受け入れた敦賀の人々の温かい心を後世に伝えていきます。



人道の港の歴史に関する資料を展示している人道の港 敦賀ムゼウム



昨年10月に寄贈された大迫氏のアルバム



73年ぶりに再訪したメラメド氏(右) (平成26年7月3日)

## Episode 1940 ユダヤ人難民

ジオストックへ行き、そこから船で敦賀に渡りました。彼らはその後、神戸や横浜から第3国へと逃れました。  
**ヘブン(天国)に見えた敦賀の地**  
敦賀に上陸したユダヤ人難民は「敦賀が天国に見えた」と語っています。上陸したユダヤ人は、道中で所持金等を奪われ、服もボロボロな状態。こうしたユダヤ人と敦賀の人々との心温まる交流のエピソードが残っています。  
● 一人の少年が難民にリンゴなどの果物を、無償で配った

## 紡ぐ 人道の港の歴史

人道の港の歴史の始まりから95年余り。金ヶ崎緑地にある人道の港 敦賀ムゼウムではこの2つの人道の港の歴史に関連する資料を展示しています。残念ながら、ポーランド孤児として敦賀に上陸した方々は全員亡くなられましたが、孤児の一人であるレオポルド・クレシヤ氏の長女アンナ・ドマラツカ氏が昨年9月に敦賀を訪れました。人道の港 敦賀ムゼウムを見学した後、孤児たちが上陸した地点にも足を運び「父と同じ道をたどって嬉しい」と話しました。また、杉原千畝の「命のビザ」で敦賀港に上陸した

米国在住のレオ・メラメド氏が「昨年7月、73年ぶりに敦賀を再訪。「母が『2年ぶりに楽に呼吸ができる』と言ったことを覚えている。温かい敦賀の人々のお出迎えは安全の象徴のように感じた」と当時を振り返りました。そのほかにも、敦賀に上陸したユダヤ人難民の親族が敦賀を訪れるなど人道の港が繋いだ命は今も歴史を紡ぎ続けています。また、昨年10月には、当時ユダヤ人難民の輸送に関わった大迫辰雄氏へユダヤ人難民から感謝の気持ちを込めて贈られた写真を収めたアルバムが、大迫氏の元部下の北出明氏によって、市に寄贈されました。

ウラジオストク



# 命と希望をつないだ 人道の港 敦賀

なぜ敦賀港が「人道の港」といわれているのか知っていますか。近代・国際港として繁栄した敦賀港には、多くの人々を温かく迎えた港としての2つの歴史があります。

## Episode 1920 ポーランド孤児

**敦賀港**は1899年（明治32年）に外国貿易港の指定を受け、国際港として重要な役割を与えられました。1912年（明治45年）には、新橋（東京）金ヶ崎（敦賀）間で欧亜国際連絡列車の運行が開始。日本とヨーロッパを最短距離で結ぶ拠点港となり名実ともに「東洋の波止場」として繁栄しました。  
そして、この時代に人道の港としての歴史が始まります。

### シベリアの孤児たち

1919年（大正8年）、ロシア革命後の内戦状態のシベリアには、ロシアに祖国を滅ぼされたポーランドの政治犯や愛国者の家族、内戦の混乱を逃れてきた人たちが多数いました。彼らは、過酷な重労働や飢餓、疾病の中、悲惨な生活を送っていました。特

### 受け入れする敦賀の人々

このポーランド孤児たちが日本に上陸した港こそが敦賀港でした。  
上陸した子どもたちは、瘦せておりボロボロの服を着ていました。そんな子ども

に親を失った子どもたちは身を寄せる場所もなく生命の危機に瀕していました。この凄惨な状況を見かねた、ウラジオストク在住のポーランド人たちは「ポーランド児童救済会」を組織。アメリカをはじめとする欧米諸国に働きかけますが、ことごとく失敗に終わってしまいました。最後の頼みの綱として、日本に援助を要請すると、当時の政府は、救済を決定。すぐさま日本赤十字社に依頼し、1920年（大正9年）と1922年（大正11年）に合計763人の孤児たちを受け入れられました。



敦賀の松原での孤児たち

たちの状況を知った敦賀の人々からは、菓子や果物、玩具、絵葉書等の差し入れや宿泊・休憩所等の施設の提供など惜しみない協力が次々と寄せられました。  
敦賀での滞在時間は数日間、長くても1日というものでしたが、当時の敦賀の人々はその短い時間でも、異国の地で不安な子どもたちにできる限りの温かい手を差し伸べました。

その後、孤児たちは東京や大阪の収容施設で過ごした後、第3国を経由してポーランドへ帰国しました。